

最優秀賞

透明なルールを破る

木脇中学校 二年 佐野 心美

佐藤いつ子さんの「透明なルール」を読んだ感想をひと言で表すと「自分の気持ちを伝える勇気の大切さ」に気付けてくれる本だ。

主人公は私と同じ中学二年生女子。学校生活での考え方が自分と似ていて親近感が湧いた。さらに、主人公の優希が友達との関係に悩み、本当の自分や気持ちを出せなくなってしまふ姿は、自分と似ているように感じた。

物語では、中学二年生の優希が友達との関係の中で「透明なルール」に縛られており、本当の気持ちを出さずに生活している。表面には出てこないけれど、みんなが従ってしまふ空気や雰囲気明らかに存在しているルール。その「透明なルール」に気づき、それに立ち向かおうとする過程が描かれていた。ストーリーはシンプルだが、ページをめくる度に自分の学校生活と似ていて、共感した。

特に印象に残ったのは、四人組のグループに入っている優希が自分以外で出かけていたことを知り、不安な気持ちに煽られている場面だった。自分だけ仲間外れにされているのではないか、何か嫌われるようなことをした

のかと悩んでいる優希の気持ちは、前にそれと似ていることで悩んでいた自分のようだった。私も似たような経験がある。仲のいい友達が他の子と遊んでいたことをSNSで知ったとき、複雑な気持ちになった。頭の中では「たまたま誘えなかっただけ。」とわかっていても、正直に言うと、「私は必要とされていないのかもしれない。」と考えていた。その気持ちは優希と同じだった。

この本から学んだのは、そうした不安を一人で抱え込むのではなく、信頼できる人に嫌だったことを話して、相手に伝えてみる勇気の大切さだ。優希も最初は自分の気持ちを隠していたが、少しずつ言葉にして伝えていくことで相手と気持ちが通じ合うようになった。私も以前、友達の言葉に傷ついたことがあったが何も言えず、そのまま距離ができてしまったことがある。その時は、「黙っていれば平和に過ごせる」と考えていたが、結局は自分が苦しむだけだった。

この本を読んでから、最近では自分の気持ちを少しずつ言葉にするようにしている。授業の班活動で意見を出すときに、自信をもって「私はこう思いました。」と伝えたら、相手も受け止めてくれて、話し合いがうまく進んだことがあった。その経験を思い出すと、優希が自分の気持ちを伝える場面は自分への励ましのように感じられた。

友情についても深く考えさせられた。本当の友情というのは、ただ一緒に遊ぶことや笑い合うことだけではなく、お互いを理解しようとする事、自分の気持ちを素直に伝えることだと気づいた。私には仲良しの友達がいるが、時々すれ違って喧嘩することがある。以前は「これ以上言ったら嫌われるかも。」と思っていたが、そのせいで余計に悪化したことがあった。この本を読んでからは、伝えるのを怖がるのではなく言い方を変えて伝えるべきだと考えるようになった。

この物語には「自分らしさを見つける」というテーマもあった。本当の自分を隠して周りに合わせてばかりいると、楽なようで心の奥では苦しくなっていることがある。私も「嫌われたくない」という気持ちから、自分の意見を押し殺してしまうことがよくある。でもそれを続けていると、「自分って何だろう。」「自分が意見を伝えていいのか。」と分からなくなってしまう。優希が勇気を出して少しずつ自分を出していく姿は、私に「自分らしくいいい。」と教えてくれてるように思えた。たとえ多くの人に好かれなくても、自分の気持ちを大切にすることが結局は自分を守り、強くすることになると感じた。

この本は、私に「本当の気持ちを伝える大切さ」を教えてくれた。読み終えたとき、自分に少し自信がついた。これからは学校生活や人間関係で悩むことがあっても、一人で抱え込まずこの本のことを思い出して、自分らしく前を向いて進んでいきたい。

優秀賞

心の檻の開き方

木脇中学校 二年 穂園 莉愛

「透明なルール？」私はこの本を見た時、不思議な気持ちになり、気づけば手に取っていた。そして、物語を読み進めると、主人公の優希が自分のように感じられた。SNSの「いいね」一つで悩んだり、自分の趣味を隠したり。周りからどう思われるか、を気にしてしまうことが、私とそっくりだった。誰に嫌われたとしても、自分の人生が終わったわけじゃないのに、周りの目を気にしてしまっている。主人公の行動は、私にもよくあることだと何度も感じた。

「透明なルール」とは、校則のように決められた事柄ではなく、生徒の間に自然に生まれる暗黙のルールのようなものである。この本は、同調圧力に縛られて生きていた主人公の優希が、様々な出会いを通じて「透明なルール」に立ち向かう話だ。

心に残った場面が三つある。一つ目は、優希が友達のSNSを見た場面だ。SNSにはグループの皆がパフェを食べている写真がアップされていて、自分だけがその場にいなかった。私だったら、なんで誘ってくれなかつ

たのだろう、と悲しい気持ちになる。優希は、みんなが写っているSNSの写真に「いいね」しようか迷っていた。私もこのような場面にあったら「いいね」をするか悩むだろうな、という気持ちになった。

二つ目は、体育祭で友達とお揃いのリボンを買うに行く場面だ。友達は髪が長く結ぶことができるが、優希は髪が短いため、りぼんで結ぶことができなかった。友達のさりげない言動に傷ついても自分の気持ちをはっきり言えず、その場から逃げ出してしまう。優希はそのあとに謝罪のメッセージを受けても本音が言えず、角が立たない返事をしてしまった。私も、相手を傷つかせたくない、空気を悪くしたくないという思いで、優希のように自分の気持ちを抑えてしまうことが多い。

三つ目は、優希が「透明なルール」に縛られず、自分の意見をはっきりと言う場面だ。生徒会に所属している優希は学級委員も兼ねている。体育祭のスローガンをクラスで話し合っているときに、優希はクラスの全員の前で言った。それまでの優希は自分の気持ちを伝えることができず、「周りからどう思われるか」「空気が悪くなってしまわないか」を気にしていた。だが、自分から進んで意見を言う優希がまぶしく感じられた。他の人の意見も尊重しており、心を打たれた。

ずっと周りの目を気にしていた優希に自信を持たせた二人がいる。一人目は名門女子高からの転校生、愛だ。愛は不登校気味だが、ちゃんとした自分の価値観があり、「好きなことは好きって言っていいんだよ」と優希に話す。この言葉は、他人に縛られず、自分の意見を言っているように感じた。二人目は生徒会に入っている誠だ。誠はクラスでいじめられながらも、自分らしさを持っていた。この二人の言動や行動は、「周りからどう思われるか」を気にせず、自分らしさを表に出していくことが大事なのだということを示している。優希は二人

との出会いを通し、「透明なルール」が自分で作った心の檻だと気づいた。

私は優希が一步ずつ前に進みながら成長していく様子を見て、読者にも希望を与えてくれる作品だと感じた。私も中学生として「透明なルール」に遭遇することが多々あるだろう。だがこの作品を読み、無理に周りに合わせなくてもいい、自分の思ったことを言っているのだと気付かされた。私は、この作品を読んで、自分自身で心の檻をつくっていることに気づいた。愛や誠のように、自分自身の生き方を貫き、価値観や自分らしさを大切にすることが心に響き、大きな勇気をもたらした。私は、前の優希のように、周りの目を気にしてその場から逃げてしまったりせず、自分の意見をはっきりと言えるようになりたい。この本を読んで、周りの目を気にして自分の気持ちを我慢しない、自分の意見をはっきり言うという必要なことを学んだ。